

城北地域労組協の運動と永瀬博忠さん

外谷 富二男 (埼玉県/城北地域労組協事務局次長)

城北地域労働組合協議会(城北地域労組協)は旧全金板橋地域支部と旧全金豊島地域支部が、①中小企業労働組合運動の探求、②未組織労働者の組織化、③個人加盟制労働運動の解明というテーマを掲げて10年前に発足した。

この組織の発足に至る経過においても、また、この組織が発足して以後の運動の理論と実践においても、永瀬さんは、常にリーダーとしての役割を發揮してきた。

当時は労戦問題で、連合にいくのか、全労連にいくのか、二者択一的な選択が迫られている時でもあったが、私たちは、中小企業現場の実情や、それまでの私たちの実践経験から、どちらにも属さない第3の道を選択した。総評の果たした積極的な面は評価しつつも、労戦問題の経過の中で変質し吸収された原因として「未組織労働者の組織化への取り組みの弱さ」「政党との関係の未成熟さ」「人的育成の欠如」を見ていた。

事業所の90%以上を占める中小零細企業、この組織化なくして日本の社会変革はありうるのかというのが、彼の実践的なテーマであった。

中小零細企業における組織化をめざすためにも、中小企業の現状にあった運動の探求が必要であった。彼は「資本論」の解明については、学者、研究者に伍すほどの勉強家であったが、彼にとっては、それは中小零細企業の現状を改革するための「変革の理論」であった。未組織労働者の組織化のたいへんさや、中小零細企業での労働運動の困難さを実践する中で、彼の到達した理論は「反独占中小企業擁護」というものであった。

組織化の活動を真剣に取り組まなければ中小の現場にあった運動理論は構築できないし、現場の感情にもあった理論がなければ組織化も進まない。実際、彼はどんな些細なことでも労働者から相談があればそれをおろそかにせず、真面目に接し、同じような問題を繰り返し持ち込んでもねば

り強く対処した。「組織化」に対する彼の考えは、単に組合へ加入させるということではなかった。単純に数が増えればよいというものでもなかった。

中小の職場で労働者の要求を組織し、実現させる資質と民主主義を定着させる労働者・群をつくり出すことであった。事実、城北労組協の中には一人職場(組合員が一人しかいないという意味)で、諸要求を実現させているたくさんの事例がある。

城北地域労組協の10年のあゆみの中で私たちは新たに二つのテーマを追加した。「労働者協同組合を労働組合が持つこと」「人的育成のための共学舎運動」である。

中小の職場で運動を進め、組織化をはかるには、ワーカーズコープの運動と実践がどうしても必要である。また、中小企業で働く労働者が卑屈にならずに自己を高め、実践を通じて運動の理論化をはかるには相当の学習が必要である。とりわけ「共学舎運動の定着化」は永瀬さんの夢であった。今、共学舎運動は2年を経過している。

10年のあゆみのうち7年は、彼の闘病期間である。癌の告知を受けて後、まさに癌と向き合い、闘病というにふさわしい姿勢を貫いた。そのかいあって、癌は奇跡的に克服されたのであった。この期間は、彼は私たちに「生きるということとはどんなことか」を身をもって教えてくれたように思う。

彼が口癖のようにいっていた「より良い人生を生き抜くものこそがより良い死に方をするのだ」という言葉どうりの人生であった。